



和名日注解

乾



字を半日さるる定古之糸寺町の
道平ふとあるなふ又の風推子
いふくも秋葉茶何しとさふ
此語何者謂く此語は店換ひ
はるるとのあまきし種を梓子の本
文子と我ふを流よとてさふ
とあそ又れえ各れ自らんは
巻くも語ひしは解かす



目号
品番

——う床くあぢきしんもあぢの
おしふ——のあぢあぢあぢ
海王千木難くせ社千一水を
くらせしん——あぢるもあぢ
くらく高津のふれあぢ千
はる甘真山社を浪束ははれ
よ——あ——はくく人て約のまら金
海王を採りし海まなわし利

あは詩社文質をくく歌
け花を舞をくくは明暗をた
——う——山道はあぢもあぢ
あぢあぢあぢも——あぢの山
このあぢあぢあぢあぢあぢ
といあぢあぢあぢあぢあぢ
あぢあぢあぢあぢあぢあぢ
あぢあぢあぢあぢあぢあぢ

とれは南無阿彌陀佛

五言真經



寛政八年丙辰秋

自序

以て此の書は我々の心の清きくもくもく
一茶坊の語らむを以てしよふに於て是を以て
ふれし中にもおぼゆる七部成とて之を
深き心し形もなきなり冬は清りの俳諧
古の連句はくらの山の井一を以てし
てはあまのホキを以てしよふに於て是を以て
しよふに於て是を以てしよふに於て是を以て

下りて其方よりし可解ししを諸系乃後
少くもこの方形を以て其まの如く此白乃附く
諸の句法を以て其のよき者なるを以て人可
なりとて其方洋の夜すは其神燭の道に字の
何中あるを大に如くしに其方あるを以て其
昔の系相を以て其まの如く其方乃其系
乃其方其方なるを以て其まの如く其方乃其
其方乃其方其方其方其方其方其方其方其方

あつた連なりつし書の林を以て其系
そのつた連なりつし書の林を以て其系
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
少くもこの方形を以て其まの如く其方乃其
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方
其系乃其方其方其方其方其方其方其方其方

冬月日注解乾

浪花 黄華庵升六著

雪をもちて遠の雨よあまらひの雪よ
とふりくくらあししにまかきこり
佇はくくくらあししにまかきこり
くおゆえ侍らむりー狂方の才
古は玉よたきりーしををわらし
とひ出せし侍り

ねのあししにけしに竹枝よ似たる水 芭蕉
けり真まえ年屋陽よ赴あししの雪も一説道くまふを

この書として文ね風を便して函者へあしのかうらうら
とくうらるる母をよまうこのおむくあしのりこ子歌を
もそより出たりと云け説をそと亦一説を乃銘りあられ
くうは服を味はちあねいそより一とけ表題出たりと
あつこの説より謂へり著をのさ能撰もそと向一註を
け説い余情紙毫より一證一冬のりこ云題号もあれ
ちりあうらと有り、これの説よりちりくや見ん人のあ
はるし用ゆへ一けおれも較多解あねと較るは思ふ
すあといくさるるさう一たすうもあえこれやまのりか
一の佐治の唱へりくをそあまのこさうあをそとてまのり
とん説ちちあうく一或人疑く曰一部の説を用るる何
そまやうたすやとてさうあんや汝の説のこくあを

みの者よりよりしてこくしと説は人一あうら一又あれ
こまよここあまのり乃説よりいさく風はちりく一
とりよ答回まうこれあうら一と云らる一偶をのこちりく
の二種よこてい古ちりも改題と一のあ標くと云らるや
例まは法甚難解すもさうく一とのりあうら一と云らる
一併よこていけ一の佐治巻なりあうら一其次に初言志
くれ炭より雲月やこあうら一とのと題する付らあうら
わらうらあうらと云らる一説を通てあすこあま
説と一のあ標くと云らるをまうらさくあをらるるわら
のこまをそとて説しを一あうらやあまの銘りの銘よりい
たりとてこしりあうらくやあうら一銘いはちり後述の人あ
あうらあうらの銘をそとて説しを一あうらと云らるるや

きのりららふ公の論よりし神祇の題よりあらはされしを
 の俳諧をわらふとて一説一巻を著ししをそののりと動するが
 あり。句解はかゝるまかしの原はまひつらゝる様すゝら
 言の休まらり似たりとのねりて作りあつたを竹分山城
 國の隠士にして暇をふかして僕一人を住して山を漂泊
 して後小庵を築き居たりて匠を業とせしむる世ま
 かりきさうしやとらゝる天下一庸醫竹斎とありれをよ
 狂言扁鵲と春婁も及りぬ竹分をよめぬ病家い悪ありたり
 竹分物語とすあり。〇ねり二字のり或人の解は白ねりの二字を
 白のぬりて只風の力等と唯千のりありとすそのの風調ぬ
 ありとらゆて初語の余りたりを時代の風調をねりねり風の
 とを讀はるゝと解して音のりとのりをぬ

牡丹葉やうく分あふ降の名あつたを

をそ我中よりして鹽よりぬをすお外
 手にとらひはく人泪をちりき秋の暮

まゝはこを引かねるの二字を白のりよりよめぬと
 解するをりは解用ひてその引まの牡丹葉やうく或は
 まをそねりて手とりはく人の涙を初語の余りたり
 とのり全く白のりより用ひてそをぬ除く時の白をよめぬ今
 けりたりとねりねるの二字を除くると一白の風の力等と
 りよめしとてらひはく人泪をちりき此二字を白の中よりよめぬ
 今の用ありやけり白混してその白をよめぬとてはくしてそを
 以て風調ぬまをよめぬとてその白をよめぬとてはくしてそを
 ちりよめしとてらひはく人泪をちりき秋の暮とてはくしてそを

みやまの余りさるゝの華しきやうに——又芙蓉七郎抄よりねむ
 の二字式ル人多くの一致の意味ありやうにやういふこと似て答曰
 命と古人の証文詞書より狂言の才士とありやうにねむの
 似る外にいふ事ありやうにやういふこと似て答曰
 我もねむをり風人ぢやと云ふていふは後述のうらにんし
 らうと云ふことありけしやうにやういふこと似て答曰
 うらにんしと云ふことありやうにやういふこと似て答曰
 まうねむの才士とはやうにやういふこと似て答曰
 うらにんしと云ふことありやうにやういふこと似て答曰
 狂言と云ふことありやうにやういふこと似て答曰
 風を毎——と云ふことありやうにやういふこと似て答曰
 を破りて彼り譲る道にありやうにやういふこと似て答曰

ををらふてい詩抄よりねむありねむはねむありやうにやういふこと似て答曰
 連らよねむありやうにやういふこと似て答曰
 てねむありやうにやういふこと似て答曰
 をねむありやうにやういふこと似て答曰
 時いふも子細のちるやうにやういふこと似て答曰
 ものねむありやうにやういふこと似て答曰
 を別よとぬりやうにやういふこと似て答曰
 ねむの二字を除くやうにやういふこと似て答曰
 後述よ門人等ねむの二字を除くやうにやういふこと似て答曰
 披るも翁迂化のほ門人等ねむの二字を除くやうにやういふこと似て答曰
 又面か——と云ふことありやうにやういふこと似て答曰
 狂言あり——の——と云ふことありやうにやういふこと似て答曰

ありては、又脚^ハ迷^ハ子^ハ足^ハ采^ハあ^ハく^ハあ^ハり^ハく^ハさ^ハぬ^ハと^ハが
く^ハす^ハる^ハ氏^ハソ^ハく^ハシ^ハく^ハハ^ハハ^ハホ^ハの^ハ困^ハ窮^ハう^ハて^ハせ^ハる^ハを^ハり^ハ
く^ハて^ハる^ハと^ハま^ハる^ハく^ハ——亦^ハハ^ハヲ^ハ及^ハセ^ハヒ^ハト^ハあ^ハる^ハの^ハ故^ハ不^ハ列^ハ免^ハき^ハ
と^ハ云^ハり^ハさ^ハる^ハあ^ハれ^ハ留^ハり^ハて^ハあ^ハる^ハ子^ハ孫^ハと^ハあ^ハく^ハ白^ハま^ハる^ハと^ハ

有^ハ明^ハの^ハこ^ハろ^ハ水^ハ不^ハ洒^ハ惹^ハつ^ハる^ハと^ハき^ハく^ハ 荷^ハ兮

は^ハ才^ハ三^ハ三^ハ水^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハん^ハて^ハ教^ハ白^ハの^ハ竹^ハは^ハ工^ハ赤^ハ越^ハ——は^ハ
は^ハあ^ハる^ハも^ハ教^ハさ^ハぬ^ハま^ハり^ハて^ハ才^ハ之^ハ少^ハい^ハま^ハふ^ハ味^ハ之^ハ天^ハ和^ハと^ハ享^ハの^ハ以^ハ
ち^ハて^ハ不^ハ洒^ハ惹^ハつ^ハる^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハの^ハ定^ハく^ハ所^ハの^ハ時^ハを^ハ候^ハ杯^ハ赤^ハ喚^ハり^ハて^ハえ^ハ
ら^ハい^ハま^ハの^ハ日^ハ杯^ハの^ハま^ハと^ハ七^ハ部^ハの^ハこ^ハろ^ハも^ハ讀^ハま^ハり^ハ字^ハあり^ハひ^ハあ^ハつ^ハる^ハ
た^ハの^ハを^ハ——き^ハこ^ハろ^ハの^ハ官^ハ名^ハを^ハ候^ハ候^ハの^ハと^ハ云^ハと^ハ水^ハと^ハ
り^ハく^ハり^ハこ^ハろ^ハあり^ハや^ハま^ハり^ハ——本^ハ人^ハは^ハ後^ハを^ハ辨^ハり^ハて^ハ曰^ハ王^ハ水^ハと^ハ云^ハ
へ^ハい^ハま^ハり^ハく^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ非^ハ人^ハ偏^ハと^ハり^ハよ^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ

仇^ハ語^ハは^ハ故^ハ人^ハあり^ハと^ハ看^ハ碑^ハ——ら^ハく^ハ古^ハ式^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハ
も^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ讀^ハま^ハり^ハ候^ハ候^ハの^ハ指^ハ合^ハあり^ハと^ハり^ハく^ハま^ハる^ハ水^ハを^ハ
人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ指^ハく^ハ候^ハ候^ハと^ハ云^ハと^ハ才^ハ之^ハ少^ハい^ハま^ハふ^ハ味^ハ之^ハ天^ハ和^ハと^ハ享^ハの^ハ以^ハ
白^ハつ^ハま^ハる^ハい^ハま^ハり^ハ——は^ハ古^ハ式^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハ
亦^ハ——仇^ハ語^ハの^ハ式^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハと^ハ非^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ
佛^ハ舎^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ
仇^ハ門^ハに^ハ後^ハつ^ハる^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ
と^ハい^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ
其^ハの^ハ官^ハ名^ハを^ハ非^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ人^ハ偏^ハと^ハ云^ハと^ハ貞^ハ門^ハの^ハ擲^ハキ^ハと^ハ云^ハ
勿^ハ論^ハは^ハ才^ハ之^ハ少^ハい^ハま^ハふ^ハ味^ハ之^ハ天^ハ和^ハと^ハ享^ハの^ハ以^ハ
ま^ハり^ハて^ハ是^ハを^ハ説^ハく^ハあり^ハと^ハ云^ハと^ハ水^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハ
ま^ハり^ハて^ハ是^ハを^ハ説^ハく^ハあり^ハと^ハ云^ハと^ハ水^ハを^ハ用^ハひ^ハて^ハま^ハる^ハい^ハま^ハる^ハと^ハ云^ハ

是れ心を盡りたるの言後にて用ゆるも又のては子有ぬら
月を指せん斗りの料とともなりけは説程すすゆれ未
理成るもせんなきをわすれ月をさすすまきありしは
此方明らき水の名よ計りきしうりゆく亦ありしは
作者のお母も有ぬとありしは五文字を妙なりし一
ちけしきくありし位ゆく候り惟も牙三と成りし有ぬの
りく居りしはあり 附とありき山系公の風ね人探の
はとありあるし

かゝらるるをぬりふありてま 重五

は志るをち酒衣のありをけりしは作者の骨打
あまのいとまゝけりしは酒衣の附ありし
さましく候りふとありしは骨打を休りしはあり

すんすんとして多し故人の骨打り白小魂を入らるるま
しとまを赤くしてありしは前白のくりしはありしはあり
寂り

朝鮮のわたり居る白ひきさ 杜國

きとるの行那辺の昔と解す人ともありしはありしはあり
酒衣のわたり居るしはありしはありしはありしはあり
とまを赤くしてありしはありしはありしはありしはあり
一白は坊をありしはありしはありしはありしはありしはあり
十けをこととありしはありしはありしはありしはありしはあり
日けちちりしはありしはありしはありしはありしはあり

正平

け白粉刈りしはありしはありしはありしはありしはありしはあり
きとるの風浦と米を刈りしはありしはありしはありしはありしはあり

米よりの軽多ねも刈りし秋とけ既もあまの
おれとも参り益あり一繁とれん思ふ一ぬ附まにちちの世の小
あひちをれとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
ほちちりぬとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附

わう屋の清くやとくんあつりあそ 野水

け白屋の世をそとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
寂しき書小妙く不静限りあそまを有んた作りしあそ
悦びの文をそとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
のよう小作りし文をそとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
しとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
のこびとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
ころちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附

風雅の文をそとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
考の十篇小文をそとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
字のかりかしくしとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
ましきを浅芽う若よま思ひを井のよはふおとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
とい人を助うんちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
やとちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
まどく蕉門の悦はけちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
味あつりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
まにちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
中ちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
居やちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附
その中ちちりぬ秋も央るころとちちりぬ赤を刈り附

新法の時をさあぐしを焼く 芭蕉

庭ぢりの翁と附くわうはくぬちが那はめとりの言ふは林か
あうらう傍沸ふりさぬを味ふるーさくくの詞すらく
とのま便を白りせ新法のうらう言ふ成あり

あうらうひんふ米さうー 虚 家 杜國

けいふふ子絶へーといふの粒さる人の代国柳て世さるふ
妻すししあうて九十九髪のをねを漬く人科す火成焚
あうらうさうちをわあー

田中あうらうこちんう柳さうさう 荷守

さきき余程の附く柳さうさうあうの言ふうて小ぢんう柳と
白作さう人田中あうらうの手はさう田中うあうと云詞さう
及セハトあれうて小ぢんう柳と伊勢の山田のふとらう浮海と云

あうらうとあひせが披ふ譲りてをを拜のた

あうらうあひひ引人さちんさう 野水

柳の水辺を附くあうらうあうあひ引人の御波のさうえ
ゆらゆらありあひひさうわうらう沈まわをさうおらうて作り
あうらうあう

あうらうあを横さあうあう月をたし 杜國

あひ伸しうて横水眺むあ月とさう月あうさう

隣さうさうさう所さう下り居る 重五

さうーあを強りさうさうサハラ及セハサトあれうてさうさうさう所
あうらう子水話さうのさう住居のあうあう体を月細さう云
さうさういよをさう佳位と附く

二乃尼水近邊の花のはうらうさう 野水

前句の所より下り居る人を常より居る人よりいへば都して仕
振する人のまゝを引して已う者より立降り居るものあり居よ云
あり亦五日三日の晴を乞ねて帰るをも下り居よ云の或は若
下り里あり也よ若し父入ると云ふ同し一亦りやうをたおち人
しも清位をすくさるるを院の君と稱し一ちあつるあり
附よと所より居ると云人を清所つとちおちる人とも
其人情を附より二の居ると一箱二箱と云うこと一その居よ
かのたう下り居位との健一すをるるはまきやまはくのむり
を清り也一近侍の花乃集りいひのわかぬれま仕のち
としも花人の清遊扱いとちまきささる小倉を清
娛樂の差よりと人付るに扱ぬる一しりさまよふま
おちり遊るものありしうを例一世よまきりし

際とあつるいへるより身中の心 芭蕉

け句を或人のけ句にけけけけけ人をち句のまきりしを
人と云ふを際小舞を喻し一の附くと舞しと云は
舞の句例也

ハなや山吹んまき二十ふちをさし
るんまきいへく 梅子乃 時

おを引してけけけけけ解きうけれそをち句の人と云は
先赤越うけの所より居る人との句一うみよる
まきりし例もいへる人しと際小舞と云ふは
しとち句と同答の附と此扱ひを妙くまきりし
扱者の世よと云われもの清調座扱と云われの物り小
舞人命婦後進のまきりしと云ふ

律も昔も今もその例を山小名ひあし九ううー
附まの昔も今も人のあうー昔も今もうーうううう
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のあうううううううううううううううううううう
律も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん
ーー原氏小名あううううう

のり物小名透顔おおろふふ 重五

その前句の人ありて今人の位を定り際ハ律と今もあうう
詞のううううううを上指のあうううううううううう
うううううう人柄をも今も今も今も今も今も今も今も
自らをうううん

今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も 荷兮

昔も昔も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
ー一曲を今も今も今も今も今も今も今も今も今も
附うううううううううううううううううううう
豫譲く今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
つけねひー今も今も今も今も今も今も今も今も今も
の木くれ今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
乱付も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
引く今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も
用ひー今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も今も

ぬき人の記念のねろ吹あはして 芭蕉
矢を放りともより吹あはして 芭蕉のなををきり
せりくー 世人の記念のねろをきり 芭蕉の二句の
うらりをきりきき

志し宗祇の名をつけ 水 杜國

なるとちうのまけ 水を清くはけいさる 熊坂の種
おねり美徳あり宗祇の水もけいさる 九らもの清
き熊坂の物アンのねと風流なる宗祇の志水との對句なる
し宗祇の水は美徳必那上野山田庄美徳川のねり
ありト七段樓ありあり ねりて略見 ねけの
堂子ありと孔子の語子逝者ハかくのトとねりてを舍
すしちうに基し 慕悪の熊坂も風流の宗祇も今いて

名のこゝと生者必滅の理をいし 作者のちを
ねりて

筆後 水 荷子

けい宗祇の志水をきり 枕杯をいし 附く
とねりて ねりて 宗祇の志水
世の中とさし ねりて 宗祇の志水
とねりて ねりて 宗祇の志水

冬 唐 野水

なるとちうのまけ 水を清くはけいさる 熊坂の種
おねり美徳あり宗祇の水もけいさる 九らもの清
き熊坂の物アンのねと風流なる宗祇の志水との對句なる
し宗祇の水は美徳必那上野山田庄美徳川のねり
ありト七段樓ありあり ねりて略見 ねけの
堂子ありと孔子の語子逝者ハかくのトとねりてを舍
すしちうに基し 慕悪の熊坂も風流の宗祇も今いて

いそいで白のまらう坊月人〜人を知りて儒家詩人
あつたに幾うも延しし異体なる人の世に多くは白き
しつた詩人の名も知らる人あり亦は坊月坊月て月人
友も異なりある人あり〜と人の形を言ふて中
本権トハ作りたり〜し又権花トハ一日宗トハりつれとて權を
あつし〜中トハまき〜えさふ〜人乃ち家系をもつ人きこ 服子
ゆま子山トハまふふとつらにまふ中よ本権の〜とつら
すし〜と狼乃山トハまふふい奇を好てき〜狭し書ふよあつ
すま〜し〜の吹せぬ〜まふ散り〜とつらあれは本権よ
混〜と論す〜

うーの論とつらぬ草乃夕々トハ 芭蕉

けり或人の解は古言ニ大人をう〜とつらとをと大人乃

弔りて歌道の法なりあつた此法道のあ集り〜とつら
この〜とつら一はあり〜とつら牛を伍名ま〜とつら
或幸なり〜とつら牛のあふ〜とつら大人と已う猪子トハ
や〜とつらものあつ〜とつら大人の弔りは子
乃とつら〜とつら一字納〜とつらあつた此法道の職人あり
夫を此法道の〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら
〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら
牡丹は老人の風流も似〜とつら〜とつら牛の強きを〜とつら
〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら
〜とつら牛〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら
首のこの好キ〜とつら本様の白〜とつら〜とつら〜とつら〜とつら

あ〜ん〜子のうをね〜りふ牛を葬つ〜るんをこの位〜
さね時あ〜け附の世のね〜のわ〜きふよりや越向
を〜あけ〜い〜い亦大和物語よ南院の〜文牛を
借りよ半〜又の口かりに〜り〜れい牛死ふ〜り〜り
我を〜し〜る〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
か〜るふ〜りやち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

其小鯨乃魚たぬい〜り 久 杜國

此白あ〜り〜の人乃海小牛甲あ〜り〜りを鬻き〜り〜り奥高念
と〜り〜り〜れ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

とせりやりの苦〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
迂〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
同丸本と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
乃孝慈といふやふ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
の寺院より門乃堀或と梁およ赤江〜り〜り〜り〜り〜り
江子彼生多矣よ戒名ある〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ね〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

此の年忌杯の申ひは又ちしてせわたり乃後人とのた
まひく由供佛極傍の嘗ちをふさむを附りたるし
扱つて多分尙少いりしてさきよりてくよ作りたる人 牛子病ひ
けりしとていふこと死せぬ事言ふ事申ふ事ひしつをを記
近頃泰山公庵下の知り木幡の守りありし牛子病
つてしちやとて死せざるありしよりすねと止むる姓と歎
まじりたる下下の御身より不使ふ事しり 彼の山の百姓
をりしてせむれ氏神杯のちるやうなる神をの祀るとい
ふ村のくちりし柳の神とてし小き社乃侍りし
よふをさすりしはし物しつて侍りしはれは我が社の
納むるしつて侍りしはし物しつて侍りしはれは我が社の
をりしはれは我が社の

おまの病の牛とてりるがのこしく起まらるるこしくなるるは
世より多くねらる牛の年一回とて供まの体を附しん
り

ウウいのりちきうこ早乃あちるるく 荷字

おまの病の牛とてりるがのこしく起まらるるこしくなるるは
世より多くねらる牛の年一回とて供まの体を附しん
り
その裁くは女業をねらるるこしく小京女八幡をんらま
七限のねらるる女とは宗の形或は傍りの裁ひひしつて
かしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて
女との附りし 此裁をコノロトといひしつてしつてしつてしつて
娘を扶けりるよき女の姿を世の裁ひひしつてしつてしつてしつて
ひまのしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつてしつて

一を娘は若らるやいふるもや娘随つたりけり
 とあつて玉子の答を聞きしは其娘と死失つたりとて權を
 作りて中子競をりけり那邊は送り一時の煙りとか
 たり人焼く事ありけり圍中滅多りとかや一と止あり
 とて是より一して競を^{ツナシ}コノ口とてふとてコノ口の子代^コ乃
 ありける室八島縁記有ち分ち下冊や室の八を由ちたる物語
 子の代子競焼く人 或人競して回つてくつ女子附する
 さまあつて一まを子をりけるはいつく附するもなほ子の代と
 なる初の子をりけるは附してはなほいつく多し子をりける
 神の生執具とてなるありて一はなほ多しなりけり
 略し

まよひいととのまゆぐさのゆき 野水

或人の解子あふの女も妹は子をさやんとて天よ祈て心を
 碎くお妹とささるぬれもあつて眉うきこよゆん^ト附するくと
 いつりはなほもあつてあつては縁するあはれもまよひといふ
 なるい一字一向は解をぬくは附するも妹も口一清皮は
 ま仕して居る体とてれう中もゆきを年七十八才あつて
 いと小さく一ありけり元の御経をたがひ^{ヤト}て妹の室を
 奪りんと子をりけるに妹と年七十四五才あつていまも世に
 存く何まよひ眉書ふゆきとてぬりあり^ト答めたりける
 師居方おのちて非妻中書者の者もあはれ妹のけり
 りの中書ありて眉書ふゆきを妹のゆきとて妹の眉書
 子ゆん^トとあはれを附するといふは二の患妻あはれまよひ
 人^トとていふ

本式傳ニ切字と格字とあり切字のふきりたる切字
切字の受自の格字なり必ありくし若切字の記しき
受自の受自の格字なり能くしきりたる切字の記し
格字とありくし格字中子居る格字格字の記し
格字の格字と格外にありくし

おねりよこのんまに葬乃食杜國

受自の格字を成つるさるるは是れを成しきりたる
をよして格と志するは是れのおねりとおねりたる
おねりたるゆゑに格字の食は仕官の暇ありき朝
寐もあらずしと葬おねりをいふる食は格とありし
とておねりの手書をとるるなりし和角兼多堂句
葬りたる系いなりし吟おねりなりしおねりたる角り大

酒新の格をいふるをいふるなりとて是れは酒の味お
とていふなりし

那の末まらしむる格の相おねり色蕉

けりことと格とをいふるは格とてし前自
おねりたるおねりなりし格を季なりしなりし
まらしむるの味おねりたる格とてし前自の初め
りりたるをいふるは格とてし前自の初め
際なりあめしきも格とてし前自の初め
とてし前自の初め

うつぬりたるはよひまらり荷兮

はよひまらり一語して御幸車と併しなりたる格とて

作りたる〜二百年〜是さう〜のち〜
たよハ妻〜く〜奥儀抄〜日正月を
乃〜をけ月〜衣を〜
乃〜をけ月〜

床よ〜語〜男 荷兮

附〜を女〜
妻化被扱〜を附〜女を〜
〜曲輪〜
田〜
〜

〜の〜
つ〜
〜

孫さや〜けの〜 芭蕉

は意の附〜
ゆ〜
卵〜
ら〜
附余小 約束の〜
の余〜
〜
〜
〜

能大物に死すの尺若し〜其れに其真氣を隠さん〜ちりふ
無事若く夫を返さめ〜り例も有り〜我腹の所〜
口惜也〜附〜んけ附赤死のひさま〜きふ小腹をおし
く扱ひ〜其れ〜無あり

小こちちと血〜〜せり〜〜い 芭蕉

是れ他の句あり〜その送り〜ん〜ちりり言部の所〜
附〜り小こちと六後者あり〜きく〜これ炭俵小坊さふ
ちねとやりり仁正信〜りあひ〜〜い〜
戦場よ向や〜身を〜り〜勇者〜り〜
ふを〜ん〜〜い大園記の柴田り赤死亦い左平記の村上
まを〜り討死の付おあ〜い合せんも志〜ん

月を〜〜九牡丹ぬ〜人 杜國

左の裏化を〜も風輪なる体を附〜り其る酒香〜
〜い〜る〜を〜り代の牡丹をひ〜ゆ〜
〜秘赤の牡丹を人あひ〜まをたの〜
〜その好ま〜真あり〜〜月ひ送〜
た〜ん是代の句あり〜酒香あり〜人をは〜り附
あり〜

繩あ〜ちかり〜り〜れ〜 重五

〜牡丹の協を附〜り〜古文愛蓮説小牡丹
花之富貴者也〜り牡丹を写中〜も〜
の揚〜り〜楼〜も作〜ん小文下例の千昭一統を
〜り〜家〜り〜
世の中〜の裏化〜

あつしくこのと地蔵切所 荷兮

あつしくこのと地蔵切所 荷兮
あつしくこのと地蔵切所 荷兮

初冬の世とや家のいくか 社園

初冬の世とや家のいくか 社園
あつしくこのと地蔵切所 荷兮
あつしくこのと地蔵切所 荷兮

あつしくこのと地蔵切所 野水

あつしくこのと地蔵切所 野水
あつしくこのと地蔵切所 荷兮

あつしくこのと地蔵切所 荷兮

あつしくこのと地蔵切所 荷兮
あつしくこのと地蔵切所 荷兮

かきりとりやみぢりうらふさなをさるるくー一白すくー

くーひまを起し帝燭と布ーくー 芭蕉

きんぎょの国小鯛と附くろく孤燭よりーてふを鯛を
さしあしを鯛を鯛よりく啼きんとすり少なるを乃
かふ火よりーてふな敷きりばそくをるるく
きんぎょのめりくおのめりく鯛を鯛むゆり
徳とるの肉くのりく陽まのめりくおのりく
きんぎょーくかーのく鯛とるるくめりく鯛
鯛とすさくくを鯛とるるく鯛とるの一作
くきんぎょのめりく白くは中鯛とるるくーてふさく
きんぎょの時を附くわーくー

篠やうく柿と柿乃葉きりー 野水

さき赤きうりりゆーきんぎょのきんぎょを
附く熟柿の白きとるる柿の葉くくーと
淋ーきんぎょ

三線くーん不破のま 人 重五

まよひの篠やうく柿くのきんぎょさなより不破の
まよひの不破の園のまよひのきんぎょ
もあひるをよきと信の物好くー信の味きん
まよひの

及すくーん不破のま 芭蕉

まよひの三味線借りー人よきんぎょの
まよひのまよひのまよひのまよひの

乃其小なる味縁りてありくねー美深ありし亦
 其をうして抱ひて傷をよけぬ又そのれも忘りてとせ
 疑して曰あるをゆるぬふんふん人の人ハんくねとそ
 とくその何れと世よりあもあつれとも只師のま便り
 かんううのこあてる水名水の不破乃美小すあてあとも
 待てむいりたしと味せん信んともまき水のたうたれ
 かりりくし名をあらむのん出しくそそあつはうふん所
 其の体取く何れも手抱のたうたまやりりえ便をとり
 しくん出しくたしんちあうしんれ

麻さめくくのまきと七 十 社國

其の甚きをまきとトきより老人と附り白さの麻さめく
 ぬむりしをまきく何れもあつりあつりくそき時いまね

も信ちりしよまふものりあまきとくねも七十とそら
 ちんねの一字は傷きあり古きやあまきよぬをのを年
 とりあしとくハハく老ありや亦酒債尋常往處
 有人生七十古來稀

奉加めは清堂り金くしらあまひ 重五

其のあも七十四とりあつりくく慚愧をせしるあつりく
 かく清堂のまかを附りりこそ清堂の再興あまきまき若
 とこのあもくくと金銀を拵まひて竹まきすりをとんり
 つけて我のまきし七十小なるいんねもいまこ清堂のり
 ねきもあつらんより清堂金の建まありとも一後乃
 供のまきもきりき清堂放蕩と麻さめく小あしひあつり
 たりしあつり清堂世まきまきまきまきまきまきまきまき

是孤靡人のほと昔白子つうとふと便をるんはこれ
穢人少いあつうと好ははゆもちり於中少くは遠徴る
たれもあれはな子作者んを刊のしる編と作らん
しとん一とわりの人あふるうと編とえん鬘の
しとる中といふしとくくまらぬ女の油も刊ひされ
をまふりぬとん中舞の人の女は只くくあまよとく
教書のしとる中を載するとくはゆとあまよとまは
あけたる舞の月ハ存やとのうりうり

高きぬまきぬと臨済をまふり 芭蕉

昔白なる編とまふり中舞の人物をまふりよやと女の志
つれしとる小老女を付たり老女とまらぬしとあまよ
あつ作しふ語まふりしと婆子焚番之語則に老女禪那

小師しと縁海の信をまふりしと信の悟をを扶ん
たふ小女をしと信しと慈養の体をまふり一問曰
正當恁麼時如何信答曰枯木倚寒巖三冬無暖氣
て付は婆子徒二十年來俗漢養つと信を追捕ひる
焚たりしと老はまを也付しと

秋野のうらり夜まきと志のうらり 野水

けり縁海を付しとるり縁海をまふり悟の付るうらり
一休縁海の分ニ園のね小つねうらりすのまきけいしとね先
乃父とまふりしと是別無色と修しとまふり小まふり
まふりしとあつ悟るるれと禪語曰大海降看相乎言曰
空蟬声聞乎とあつ即刹那生滅ニ生而即滅滅而即
生とまふり生滅無始無終性小なりとまふり

生れ亦くこのしつと悟る取性のふをや附くんを

友の實つてしぬ事下らんしつと重五

あふの勢きまといつあをうら被て後の実つてあし二句こそ中
て静つちる容を附くちあしつてあふ手ふるふうくくる
けふ二句こそ事なり

秋より夜をひくま山うけり 芭蕉

冬に雪降のしつ小友の實の事下るふ二句こそ小附くんを
二句こそ場の事を定より句こそ樹下石上を極くく山川の
美きよちあやちの人を附くく山うけり小寂然とく
采菊を樂しと旅歌抄を取ちく友の實つてふ事下る
やうけつん

しつと典侍の肩う内侍う 杜國

あふ山うきよんをひくく休む極めて諸人多ねもほよりん
をひくくよ言ひおほひ只乃旅人といふんさねのまをさ
枕或は従者新御抄とく例の子服一脱りくちうか
るねんさしとく始しき人うくちとあふさねを多小内意
上菊の旅あふんといふくそ風俗のくちあふねい肩う内侍う
根より又事下るものくく小言ふりくちあふん

二りの花野帯尾をうりつるいんさ 重五

あふ肩う内侍うくあまの女官並居り休むねらふ林示
きんのか合ををひかきり 紀事曰禁裏清凉殿南階
前有園雞其雞諸家中雲客被出之 仙納弥市預
此事決勝負

あつちりみりつ越の獨活刈 荷兮

方少の林ふまのよき國の存物をもつて其の
 習活刈も其越乃熟語るる一は是孝白なるハ祝
 云小あしと西代のさぬを附るるとちつあそひさむよ白
 雙の老翁もほいし其を幸ふとるる一は孝民
 而と漁り懐きたるいし自出るる代とらふ一

